

ボラット

栄光ナル国家カザフスタンのためのアメリカ文化学習

2007(平成19)年5月14日鑑賞(角川映画試写室)



監督＝ラリー・チャールズ／出演＝サシャ・バロン・コーエン／ケン・デヴィティアン／ネル (20世紀フォックス映画配給／2006年アメリカ映画／84分)

……まず長ったらしい副題に注目！ 次にチラシを読み、突撃レポーター、ボラットの風体に注目！ そして、これはドキュメンタリー映画か否かについて悩んでみよう……。実際に映画を観れば、あまりのバカバカしさに度肝を抜かれるはず。しかし同時に、各賞ノミネートの事実にも、なぜか納得……。さて、「世界のキタノ」の最新作ウルトラ・バラエティ・ムービー『監督・ばんざい！』と、どちらが、どちら……？

これはドキュメンタリー映画、なんちゃって……？

ジョークの定番の1つは、自ら全然違う話をもち出したうえ、しばらく間をおき、「なんちゃって」と自らそれを強く全面否定するもの……。たとえば、白いスーツをみて、「このスーツは黒い、なんちゃって」というもので、これはアメリカでも日本でも共通……？

そんなジョークをボラットに教えたのはユーモア指導の先生だが、果たしてボラットはそれを十分理解できたのかどうかは疑問……。しかし、映画後半でボラットはうまくそんなジョークをキメていたから、やっぱりボラットの知的レベルはかなりのもの……。

そこでそのジョークを私なりに応用したのが、「これはドキュメンタリー映画、なんちゃって」というもの。ということは、この映画は……？

この映画は完全なつくりもの……

そう、この映画の主人公ボラットがカザフスタン国営テレビの看板レポーター

だということは、長身で口ヒゲをはやした彼の風貌そして長ったらしいこの映画のサブタイトルをみれば容易に信じてしまいそう。したがって、誰でもこの映画はドキュメンタリー映画だと理解してしまいそうだが、実はそれは大まちがい！

第1にボラットを演ずるサシャ・バロン・コーエンはカザフスタン人でも何でもなく、敬虔なるユダヤ系イギリス人にして、ケンブリッジ大学卒の超エリートとのこと。またボラットのアメリカ取材に同行するプロデューサーのアザマートを演ずるケン・デヴィティアンも、カリフォルニア州生まれのアメリカ人とのこと……。

さらに、いかにもドキュメンタリー風に紹介されているが、ボラットの故郷であるカザフスタンのクセーク村も実はインチキ(?)で、これはルーマニアのブカレストから北に2時間のところにあるシンティロマ村で撮影されたとのこと……。

こりゃ、まるで詐欺まがいの映画……？　そして現実にも、撮影中にボラットは逮捕寸前に、またプロデューサーは現実にはブタ箱入りさせられたこともあったらしい……。

ところが世の中何が面白いかはわからないもの。ネット情報によると、目下、日本の「ソフトバンク」のCMで大人気の、あのハリウッド女優キャメロン・ディアスがこの映画を「最高の1本」と称賛したばかりか、現実にも、2006年度アカデミー賞脚色賞ノミネート、ゴールデングローブ賞最優秀主演男優賞受賞等、この映画はバカ受け……。

何ゴトも徹底することが大切……

この映画の主人公ボラットを演じたサシャ・バロン・コーエンが、この映画を脚本・原案・製作するについては、実は既にそのネタがあったよう。つまり、カザフスタン国営テレビの看板レポーターであるボラットが、一張羅のスーツに身を包んで、アメリカ市民に対して突撃インタビューを敢行するというスタイルは、既に自身のTV番組『Da Ali G Show』の中で実践していたもの。

したがって、この映画はその経験を踏まえたうえで、その構想を大きく膨らませ、ハチャメチャなアメリカ大陸横断のロード・ムービーに仕立てあげたもの。芸能レポーターとして名を馳せた梨元勝は、今やその世界の権威となっているが、

それと同じようにカザフスタン国営テレビの突撃レポーター、ボラットも、それを徹底することが大切。

しかして、その突撃ぶりは圧巻というか、目に余るというか、とにかくハチャメチャだが、実はそれが面白い……。

最初から前途多難の予感が……

ボラットがアメリカにやって来た目的は、カザフスタンの発展のために偉大なるアメリカ文化を学ぶこと。その目的のために、アメリカ文化を突撃レポートするについて、ボラットとプロデューサーのアザマートが飛行機を降り立ったのは、アメリカ東海岸のニューヨーク。アメリカは広いが、ボラットの目的のためにはニューヨークやワシントン D.C. で取材すれば十分で、何をどんな視点で取材するかが、レポーターの能力の問題……。

根がスケベでセックスに開けっぴろげなカザフスタン男性であるボラットにとって、興味の対象は若いアメリカ女性のはずだが、前述のくだらないジョーク教室の後は、なぜかフェミニストのおばちゃんたちのインタビューに。しかし、そこで問題発言を連発したボラットに対して、おばちゃんたちは抗議の退席を……。まあ、良識派の私(?)の目で見れば、おばちゃんたちの行動は当然で、その非は一方的にボラットにあることは明らか……？

したがって、こんなボラットの突撃取材には、前途多難の予感が……。

パメラ・アンダーソンとは……？ CJとは……？

エレベーターに乗ったとたん、ボラットが荷物を開けようとしたのは、エレベーターをホテルの部屋とまちがえたため。そんなボラットだから、ホテルの部屋に案内され、ベッドに寝ころがり、イスに腰かけると、思わず自分が王さまになったような気分襲われたのは当然。トイレの中に溜まった水で顔を洗ったのはご愛敬だが、次にボラットの目がクギ付けになったのは、はち切れるような胸を小さな水着に包んで、TV上の海を泳ぐ若いアメリカ女性パメラ・アンダーソンの姿。彼女はプレスシートによると CJ と書かれているが、さてこれは何のこと……？

そこでネットを調べてみると、アメリカでは2005年8月1日から「カレントTV」という新チャンネルの放送が開始され、このカレントTVに映像を投稿する人が「カレント・ジャーナリスト」(CJ)と呼ばれるとのこと。このカレントTVとは、インターネット世代をターゲットにしたもので、視聴者は番組を観るだけでなく、短いデジタル映像を撮影して編集し、カレントTVのウェブサイトにアップロードできる。カレントTVの編集者とサイトの訪問者が気に入った映像は、1900万人の視聴者が見込まれているカレントTVの番組として放送されるとのこと。つまり、パメラはこのCJとして、自分の映像をカレントTVに投稿していたというわけだ。

取材現場が突如東海岸から西海岸へ……

そのパメラがアメリカ西海岸のカリフォルニアに住んでいるという情報を得たボラットは、何と突撃取材の現場を東海岸から西海岸に移そうと、アザマートを説得した。これには、たまたま故郷カザフスタンに住む愛妻(?)が熊に襲われて死亡したというラッキー(?)なニュースが飛び込んできたこともグッドタイミング……。

車の運転を習い、中古のアイスクリーム・トラックを買い、2人はカリフォルニアでのアメリカ文化を取材のため(本心はパメラに会い、彼女と結婚するため……?)ニューヨークをあとにすることに……。

こんな突撃取材の旅だから、この先はまさに波瀾万丈、ハチャメチャな出来事が待ち受けていることは必至……。

アメリカ横断の旅は……?

ボラットとアザマートの弥次喜多珍道中、といってもホントはカメラマンなどの撮影クルーを含む数名の旅だが、それは①ニューヨーク、②ワシントンD.C.、③ミシシッピ、④バージニア、⑤ジョージア、⑥アラバマ、⑦テキサスを経て、最終目的地⑧カリフォルニアに至るもので、いわば西部開拓史と同じ……? 各地でボラットが引き起こす抱腹絶倒のドタバタ珍道中は、あなた自身の目でタップリと楽しんでもらいたいもの。

私が途中でこりゃおかしいぞと気づいたのは、ボラットのあまりのデタラメさによってアザマートとケンカ別れし、ボラットは独りぼっちになったにもかかわらず、その独りぼっちの様子がちゃんと撮影されていること。それによって、これはドキュメンタリー映画ではなく、それなりのストーリーづくりを狙った映画だということがすぐにわかることに……。

それにしてもこの映画のバカバカしさは生半可ではない。そのバカバカしさのレベルは、かつてザ・ドリフターズの『8時だヨ！全員集合』が最低の俗悪番組と断罪されたのと同じようなもの……？ また、かつてのビートたけしの人気番組『風雲！たけし城』以上にバカバカしいものの、どこかに知的センスを伴っているのは、やはりユダヤ人の血の優秀さのせい……？

パメラとルネルでは、月とスッポンだが……

アメリカ南部のジョージア州の州都アトランタは、いつでもアメリカ映画No.1となる『風と共に去りぬ』(39年)の女主人公スカーレット・オハラが愛した大地タラのこと。その主題曲『タラのテーマ』は、誰もが愛する名曲。しかしこの映画で、そのアトランタで登場するのは太っちょの売春婦ルネル(ルネル)。ルネルと「お友達」になったボラットは、このルネルをディナーに呼んだため、「警察を呼ぶ」という大騒動になってしまったが……。

他方、ボラットがアザマートとケンカ別れとなり、1人道を歩いている時、彼を拾ってくれたのが、南カロライナ大学の学生たちのトレーラー。この中で学生たちとノリノリになって楽しんでいたボラットだったが、そんな中あのパメラがAVにも出演していること、そして処女ではないことを知って大ショック。そんなこんな女遍歴(?)の後、ボラットが妻として選んだのは……？ これを観ていると、ひょっとしてボラットは、オンナなら誰でもよかったのかも……？

ノッポと太っちょの組み合わせの妙はピカイチだが……

漫才のオール阪神・巨人が長く第一線で活躍し、その人気をキープしているのは、芸の腕前もさることながら、大男と小男の組み合わせの妙も……？

そういう意味では、この映画におけるノッポのボラットと太っちょのアザマー

トの組み合わせの妙はピカイチ……。もっとも、ホテルのベッドの上で、ボラットが大切に保管していたパメラの写真を見ながら、アザマートが1人「シコシコ」とやっていたことにボラットが激怒し、その後部屋の中でくり広げられる裸の男2人による乱闘劇にはウンザリ……。いくらノッポと太っちょの組み合わせの妙といっても、見たくもない男2人のヌード姿は願ひ下げにしたいもの……。もっとも、ボカシ技術のレベルとボカシ面積の大小は、ちょっと気になったが……？

シリアスな論点がいっぱい……

あなたはきっとあまりのバカバカしさについて笑いながら、ボラットのアメリカ横断の旅を楽しむことになるだろうが、よく考えてみると、ボラットが取材しているテーマはきわどく、シリアスなものがいっぱい。人種差別はもとより女性差別・レイプ・売春婦・処女性など、女性に関するハチャメチャな発言はまさに言語道断……。さらに、冒頭とラストに登場するユダヤ人とユダヤ教に対する徹底した差別ぶりにはビックリ……。？

他方、面白いのは、アメリカ南部のペンテコステ派の教会風景。教会に集まり、大声でロック調の讃美歌を歌い踊りながら、口々にイエス・キリストを讃える風景はよく見るものだが、その実態をボラットは見事に突撃取材したばかりか、たちまちその教派に帰依することに……。？

このように次から次へと矢継ぎ早にくり出されてくるテーマは、実はホントはいずれもシリアスなものばかり……。笑い終わったあとは、1人でゆっくりこれらの論点を検討し直してみる必要があるのでは……。？

2007(平成19)年5月15日記